



最新 Body CT 診断 検査の組み立てから読影まで 栗井和夫・陣崎雅弘 編

●B5 頁380 2018年3月

定価：本体5,800円＋税

[ISBN 978-4-89592-907-3]MEDSi 刊

近年、CTの発展は目覚ましく、その進歩についていくのもなかなか大変である。本書は、CT診断において我が国を代表する2人の放射線診断医—広島大学の栗井先生と慶應義塾大学の陣崎先生の編集による、最新のCT診断についてまとめられたものである。

本書の内容を順を追って見てみよう。まずは、基礎編として実際にCTを臨床的に運用あるいは読影するのに必要十分な事項が簡潔に書かれている。CT装置や画像再構成の理論にさほど深く立ち入っていないが、臨床医が知っておくべき知識としては十分であろう。さらに、造影剤の体内動態や副作用、安全性の問題、被ばく対策など栗井先生がライフワークとして取り組まれた事項も十分に織り込まれている。

一方、臨床編ではガイドラインなどをベースにして、各臓器の画像検査におけるCTの位置づけやCTの適応、実際の撮像プロトコルから代表的疾患の読影のポイントまでと実践的かつ豊富な内容が記載されている。特にCTの位置づけや撮像プロトコルについて、コンパクトながらこれほどしっかりと記載されている書物は国内外を見ても見当たらない。重要疾患の読影に関しては、専門医としては若干物足りないボリューム

ムであるが、CTでとことん診断するという観点からは非常に的確に記述されている。

実は、小生も同じくメディカル・サイエンス・インターナショナル社から「わかるヘリカルCT」という本を2000年に刊行した。シングルスライスのヘリカルCTが世の中にやっと普及しつつある頃に刊行されたものである。その後、21世紀になってCTはマルチスライス化、心臓CT、逐次近似、低電圧やdual energy CTと大きく進歩した。今、小生の本と本書を比較して、ページ数が増えたこと以外にこの18年間にいかにCTが進歩したか、そして臨床的役割が増したかを改めて認識させられた。そして、この進歩は編著者である栗井先生、陣崎先生らがリードしてきたものであり、その成果がこのような形で世の中に出ることに対して個人的にも大変うれしく思う。

小生も本書を注意深く読み込んでみて、基礎編、臨床編とも十分に練り込まれた内容であることを確認した。申し分ない本であると太鼓判を押したい。CT画像を読影する診断医、機器を運用する診療放射線技師をはじめ、多くの医療関係者に是非、本書を手にしていただききたいと心より願う。